

---

# 缶コーヒー

器用貧乏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

缶コーヒー

### 【Nコード】

N9610Z

### 【作者名】

器用貧乏

### 【あらすじ】

どうすれば目的地を共有することが出来るのか。

「マジかよ…」

マイナスドライバーから六角レンチに持ち替えたところで小さくため息をついて呟く。チラと掛け時計の方を確認すると、丑三つ時も過ぎた深夜三時。納期遅れを取り戻さなくてはいけないとは言え、サービス残業でこの時間まではさすがに辛い。キャップボルトを素早く抜き取ると修正部を覗き込んだ。

「駄目だね。ここ見て、直線がずれてるのが分かるでしょ？100分の5ミリくらいかな。これじゃ勘合物に入らない可能性があるわ。勘合物に入らないだけじゃなく飛び出た部分でユーザーの指や手を傷つけてしまうかもしれない。もう少し修正して」

品質管理担当の菅野洋子が俺の作った修正サンプルを付き返してきた。

「100分の5ミリ！？ほとんど直線じゃねえか。見てみるよ、もう2時過ぎだぜ。明日もあるんだ、いい加減帰らせてくれよ」

ほとんど懇願するような顔つきで菅野を見る。

「もう少しだから頑張つてよ。明日の朝から生産しないと確実に納期に間に合わないわ。今度遅れたら次はないよ、次がないということとは…、この会社倒産するかもしれないよ」

菅野はあくまで表情を崩さず、そして連夜の残業疲れをおくびにも出さず話す。

俺達で作っている製品は、いわゆる知育玩具のプラスチック部品。子供が直に触れるので特に品質に神経質なのは理解できるが、さすがに100分の何ミリまでを要求されると現場担当としては辟易してしまう。

「遅れたら駄目だからこそこれで行こうって。100分の何ミリな

んで感触あつてないようなモンだろ。これ以上粘つても無駄だつて」  
「お客さんは『良品』を納期通りに納品することを望んでいるのよ。時間が無いから、これでいいや、つて匙を投げたら仕事を放棄しているのと同じよ。あともう少しだから、ね？」

菅野の有無も言わさぬ目を見ると反論する気も失せ、ふう、と深いため息を見せつけ二、三度首を振ると製品を受け取って機械のある工場へと向かった。

作業の手を止めて先程の遣り取りを思い起こしていた。他の社員は既に帰宅の途に着き、今頃は夢の中だろう。残っているのは俺と菅野だけ。まあこれは今日に始まったわけではなく、ここ最近はずっとこんな調子。お互い単なる作業者ではなく管理者の立場なのである程度は仕方ないとはいえ…、俺もお人好しだな。

それにしても菅野はどうしてあんなに頑張れるのだろう…。100分の何ミリなんてところを拘っても仕方ないことなのに。しかもあの真剣な顔。まるでとてつもないものを背負っているような切迫した雰囲気…。

何故あんなに頑張るのか。どうせ俺達はこのプラスチック部品と同じ、単体では機能することができない歯車の一部でしかないんだぜ…。

一通り不具合部を修正し終わった後使用した工具を直し、菅野の待つ品質管理室へと向かった。菅野はパソコン画面を食い入るように見つめ、一心不乱にデータを打ち込んでいた。一応入るときにノックしたつもりだったが聞こえなかったらしい。

「おい、菅野。できたぜ、修正」

欠伸をかみ殺しながら修正品を菅野に渡す。

「ああ、ご苦労様。ちよつとそこで待つて、測定して判断するか

ら」

パソコンから目を離すと、肩をトントン、と叩くと今度は測定器の前行き何やら顕微鏡のようなレンズを覗き込んでいる。そういえば菅野ってどんな仕事してるのかって詳しく知らないんだよね…。ただただ一生懸命だってことは知ってるけど。

「なにボーツしてるの？眠いのは分かるけど」

考え込んでいる間に測定が終わっていたらしい。目の前に菅野の顔がありドキリとした。

「ああ、いや…。それでどうなんだ修正した品の出来は？もうOKだろ？」

「うん、これでOK。やっぱり吉原君は腕が良いね、言った通りに修正してくれるから助かってるのよ。いつも無理言ってごめんね」

普段の姿から想像もつかないくらいしおらしく謝ってきた。これも深夜に二人きりというシチュエーションの為せる業か。

「な、な、なんだよ菅野らしくもない。お、俺は現場担当として当たり前の事をしているだけだ。良い物を作りたい、っていうのはお互い共通の考え方なんだから別に謝ってもらういわれもねえよ」

いてもたってもいらなくなり手足をせわしく擦り合わせた。そんな素直な瞳でお礼を言われると…、恥ずかしいじゃねえか。

「いやあ、いつも文句ばかり言ってるからたまにはお礼も言わないとね。じゃあ申し訳ついでに、これと同じ品をあと4、5個作ってくれない？」

「はあ！？さつきOKって言ったじゃん！」

上っている梯子を外された時のように顔色を変え、強い口調で抗議する。

「考えたくはないけど、これがまぐれの一個ってこともあるじゃない？良品を安定した状態で生産できるかどうか確認して終わりたいの」

手を合わせてお願いのポーズをする菅野の姿を前にしては、もう何も言えない。デジャヴのように深いため息をつき現場に戻ろうと

したのだが。

「…とその前に少し休憩しよ。吉原君」

菅野の方へ振り返った眼前に何かが飛んできた。あたふたしながらその物体を掴むと、今度はその物が持つ熱さでビククリする。

「アチ、アチッ！」

缶コーヒーだった。菅野は俺がうるたえる姿を見て声を上げて笑った。その笑い顔を見て…、俺も笑ってしまった。

「それでも飲んで、お互い目を覚まそ」

そう言つと菅野は隣りのデスクの椅子に促した。

良いところあるじゃん、と思いつながらコーヒーのラベルをしてみると『朝専用 目覚めスッキリ！』と書いてある。ふふふ…、菅野のヤツ、このまま俺を寝かせず働き倒すつもりだな、と先程の満面の笑みが苦笑に変わった。

「なあ、一つ聞いてもいいか？」

コーヒーを半ばまで飲んだところで菅野に話しかける。菅野は飲んでいたコーヒーをテーブルの上に置くと「何？」と返事した。仕事場とはいえ作業から離れているせいか菅野の表情は幾分柔らかな印象を受けた。

「菅野ってさあ、何でそんなに頑張るわけ？っていうか頑張れるわけ？さっきの100分の5ミリの誤差なんて客先が要求している数値でもないだろ。なぜそこまで自分を追い詰めるんだ？」

軽い気持ちで聞いたつもりだったが、菅野はその問いに難しい顔をして考え込んでしまった。いや、話したくないならいいんだ、と口を開きかけたとき菅野が話し始めた。

「自分が子供だった頃を考えるの。私が子供の頃に遊んだ色々なおもちゃのこと。吉原君の場合はヒーロー物のフィギュアやロボットになるのかしら、私はお人形さんだったけど。私は一人っ子で片親

だったからそのお人形さんと遊んでいる時間は楽しいものもあるけど、寂しさを紛らわせてくれるとても大切な時間だった。そうして大人になって、実際作る側に回ってみるとふと考えるときがあるの。『もしそういう子供に不良品が渡ってしまったら』って。手に切り傷が出来るくらいならまだ良いと思う、っていうと語弊があるけど心に傷を負う場合があるでしょ。子供の頃に出会うおもちゃってそれぐらいのインパクトがあるんじゃないかな、少なくとも私はそうだったから。今の吉原君が修正してくれている部品についても、100分の5ミリの突起で物理的な問題でのクレームにはならないと思う。けれど私たちの知らない間に子供の心を傷つけているのかもしれない、と思うといてもたってもいられなくなるの。もし私が子供のときに大切にしていた物が不良品だったなら、どれだけ悲しくなるのか想像できないもの」

こういう深い想いがあつたから頑張れるのか……。気軽に質問してしまったことを申し訳なく思うとともに、少し後悔もした。

「もしこれを手に取った子供が……。か。菅野にはその子供の姿が見えるんだな、すごい想像力だ」

皮肉でもなく素直に出た言葉。少なくとも今までの俺にはそういうことは考えることが出来なかった。

「うん、すごいでしょ。ほとんど妄想に近いけどね」

そう言う菅野は照れ笑いを隠すようにコーヒーを飲み干した。

「わっ、もうこんな時間だ。今日は帰って確認は朝にしようか。修正に関しては多分大丈夫そうだし」

掛け時計で時間を確認したあと 午前4時前だった 菅野が提案してくる。しかし菅野の想いを聞いてしまった以上、俺も引くわけにはいかない。この提案も自身の意に反していることは今までの姿勢を見ても明白だ。

「菅野は帰っていいよ。お前が朝出勤してくるまでにサンプルは用意してやる。それでお前も満足なんだろう？」

「吉原君……。あり……」

菅野が言いかけたところを強い口調で遮った。

「俺が勝手にやりたいだけだ。それに…、俺も子供には笑っていて欲しいからよ」

そう言い残し、菅野の返事を聞く事もなく足早に自身の作業場へと戻って行った。

<  
了  
>



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9610z/>

---

缶コーヒー

2011年12月29日23時48分発行